



国 語

(9 : 20 ~ 10 : 10)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから6ページに、問題が一から三まであります。
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第 番
------	-----

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言語は、文化的な制御力の最も主要な体系の一つである。そうだとすると、一つの言語から別の言語へ移し換えるという作業は、単に、Aの言語で言われることをBの言語で言い換えることではない。

例えば、次の例を考えてみよう。著名な具体例であるが、多少の批判がこもるので、ここでは一般論風に書いておく。日本の作家のさる小説の英語への翻訳に当たって起こったことである。普段和服に白足袋を履いている中年の男性の描写があつて、その翻訳の「衝に当たられた」英語を母語とする訳者が、その「白足袋」を《white gloves》と訳されたという例である。言うまでもなく、翻訳論では、一般にこれは「名訳」の例として登場するのであり、むしろ直訳することを戒めるときに、しばしば使われる模範例である。しかし私は、これが「直訳」の弊を見事に免れているという点では称賛を惜しまないけれども、「翻訳」の本質から言うと、なおかなり根本的な不満が残ると考えている。なぜか。

「白足袋」を《white socks》と字義通りに置き換えた「翻訳」は明らかに落第である。現代の日本で、男性が通常和服を着用し、しかもその際「紺足袋」でなく、「白足袋」を着用する、という描写からは、その男性の潔癖感や清潔感、そして時代の波に逆らつて「古風」さを自らの対外的特色として示そうという強い意志などが伝わってくる。一方英語圏、特にその訳者の本来の故郷であるアメリカでは、《white socks》を着用することは、ティーンエイジャーの習慣であり、しかも《bobby-socks》などの

る、という逆説が、ここに姿を現わしている。

そうならどうすればよいか。処方箋はない。処方箋がないのならば、私がその「名訳」を批判することはフェアではないか。そうかも知れない。

注釈を付けて、実はこの英語の訳では《white gloves》と訳してあるところは、原文は「白足袋」であつて、「足袋」とはしかじか、こういうもの、今では特別の場合を除けばほとんど履く人はなく、まして「白」のそれは、能や歌舞伎の舞台の上で見られるのがほとんど唯一の機会である、というように解説を試みれば、私の言う「翻訳」本来の目的は果たされるだろう。実際に文学作品でもそのような注釈や解説を付してある場合に出会うことも、日本ではまれではない。そしてこの「白足袋」の場合に、そうする必要があつたかどうか、多分なかつたのであろう。しかし、ここでは「翻訳」の抱えている問題を抽出して展示するために、この例を借りたのであつて、それ以上にこの特定の例を云々するつもりは私にはない。

ただ総じて、日本人が西欧の文化を吸収するに当たつて、「翻訳」の際に、この点の配慮をかなり行き届かせていた、ということとは指摘しておいてもよいだろう。

(村上陽一郎「文明の死／文化の再生」による。)

(注) white gloves 白い手袋。

white socks 白い靴下。

ティーンエイジャー 十代の少年少女。

bobby-socks 少女用の短い靴下。

フェア 公平正大。

連想から、どちらかと言えば少女趣味ということになる。およそ、日本語における「白足袋」の伝える語感とは反対の極にある。それに反して《white gloves》ならば、まさに、上に述べたような「白足袋」の持つ「意味」とほぼ同じ「意味」を英語において伝えるであろう。これこそ「名訳」ではなからうか。

そこまでは私にも異存はない。しかし、では、その「名訳」で、かの日本人の作家の書いた小説を読んだ英語圏の読者になつて考えてみよう。何も知らない読者はこう考えるだろう。そうか、日本人も、潔癖で清潔感があり、かつやや時代に後ろ向きであることを服装などで顕示しようとする人物(中年の男性)は、自分たちと同じように「白手袋」をするのだな、と。つまり、ここでは、当たり前のことながら、日本人が自分たちの共同体のなかで持つている「白足袋」に関するすべては伝わらないままに、英語圏のなかでの英語の表現である《white gloves》に関する感覚と意味によつて、その日本人の中年の男性の意識や感覚が、あるいはそれらの依拠する日本の文化の総体(大袈裟だが)が納得されてしまうことになるのである。これは一体本当の「翻訳」なのだろうか。ここで「本当の翻訳」と言つたのは、その「翻訳」によつて自分たちとは異なる制御力を持った「別の」文化があることが、本當に伝わったことになるのだろうか、という意味である。

日本語で起つていふことと並行することを忠実に英語のなかに求めようとするほど、その「翻訳」は「翻訳」本来の意味を失つて、自分の言語による自分の言語の制御力の範囲のなかに閉じ籠る結果にな

1 ①④の漢字の読みを書きなさい。

2 衝に当たられたの意味として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 期待通りの働きをされた

イ 大切な仕事を受け持たれた

ウ 困難なことに直面された

エ 幸運にめぐり合われた

3 日本語で起つていふこととはどういうことですか。「白足袋」を例にあげて、七十字以内で書きなさい。

4 [] にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア やがて イ さて ウ もちろん エ また

5 私の言う「翻訳」本来の目的とはどういうことですか。文章中の語句を用いて、三十五字以内で書きなさい。

6 I 暖簾に腕押し」

II The catches the wind with a net.」

IをIIという英文に訳したものがありません。IIは筆者の言う「直訳」「名訳」「本當の翻訳」のどれにあたりますか。またそれはなぜですか。百字以内で書きなさい。なお、この二つの文を引用する際はそれぞれI・IIという言い方を用いなさい。

(注) wind 風

net 網

二 次の文章は、美術画廊を営む若瀧香魚子が、ケン（上羽硯）の絵に魅了され、ケンと絵描き仲間フクの住む青森を訪ねる場面です。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

油絵の匂いがする。明かり採りの窓のせいで、わずかに明るい天井裏。ぱちん、と音をたて、裸電球が一個、灯った。

緑のビニールシートを掛けられて、そこにも沈黙しているものたちがいた。

ケンが無造作に、無感動に、端からシートを除けていった。

ぱりぱりぱり、とグリーンシートがきわだつた音をたて、同時に世界は向こうとこちら、色あるものと光なきもの、二つにはがされ、分けられていく。

現れたのは、ぎつしり、並べて詰め込まれた大小さまざまなキャンバスだった。

どれも五十号を超す大作ぞろい。新聞紙の一枚にすらくるまれることなく裸のままに重ねられた、画材以上の扱いをされないものたち。香魚子は凛然として

「どうしてこんなことしてるんですか」

香魚子が言うのを聞いた。小さく冷たい声だった。

どうして……。思いがけない言いがかりをつけられて困る人のように、ケンはぱりぱりと頭をかいていた。そして手近なものを一枚、抜き出した。

それは手品か。彼の手が、こことは違う別な世界を切り取り引き出してくるのに、香魚子の「シセン」は吸い寄せられたまま離れない。キャンバス

いつて静止するのがやっとのようだ。

「何枚ありますか？」

声がうわづついている。だがケンはいつもと同じ、照れやはにかみやとまどいを含むふわつとした間のあと、香魚子を見ずに答えるのだ。

「そんだな。百五十枚ぐらい、あるんでねが」

香魚子の細い体がぐらりとしたように見えたのは、圧倒される絵の数が放つ無言の力のせいだったのか。思わずフクは腕を差し出し、彼女をささえずにはいられなかった。

すみません、と小さく頭を下げてしゃがみながら、香魚子はケンに向かってこう言った。

「どうしてこんなことしてるんです」

さつきと同じ問いではあったが、今度は泣き出しそうな声だった。

明かり採りの高窓から、なにか特別な光がさしこんでいるように、フクはひどくやすらかな気持ちになった。膝を折り、その場にひざまずいて、香魚子は、いとおしむようにキャンパスの縁をなでているのだ。

フクはケンの代わりに何か言おうとしたけれど、思い浮かんだ言葉はどれも声にはならなかった。収蔵しておく場所がほかにはなくて。美術館を設立したいのだけれど、うまく進んでなくて。——どれも、言い訳に過ぎない。なぜなら東京から来た彼女が言いたいのは、上羽硯のこのすばらしい絵を、どうしてがらくたのような扱いで、光のささないこんな場所に押し込めているのかという非難なのだ。

三人とも、黙っていた。沈黙へ追い込んだのは、香魚子が発する東京

スの片側には、想像もしない大胆な構図の絵が完成していたからだった。フクもまた、言い尽くせない幸福な気持ちでそれを見ていた。ケンの絵の中でもとりわけ好きな、りんごの木の色。

まるで王女の冠のように、白い、静かな花を無数にちりばめ、咲き誇る木。花に燃え立ちながら、幹を天へと向けてそそらせる木だ。だがそれが美しいのは、樹木が生い立つ地面の色、たしかかな土の色が、背後の夜の闇に「コオウ」しているからだだった。

土の色を描ける画家。フクは常々ケンをそう評している。時にはテラコッタのように赤く乾き、穀雨の頃には恵みの雨をしみ通らせて、黒く肥沃に潤って、また時としてそよぎ立つ麦の穂のパステルカラーにやわらかくなじむ。ここに根ざし、ずっと大地を見てきた彼の感性だけが出せる色だろう。

香魚子の目が大きく見開かれる。たつた今まで自分がいると認識していた狭い場所が、一瞬にして別の次元の場になった。

その華やき。その彩り。絵は、今自分が生きて暮らす現実をはるかに飛び越し、まったく違う世界へいざなう時空間の扉のようなのだ。

また一枚、絵が引きずり出される。今度は、そのりんごの木の上、茂った葉に埋もれながら、りんごの果実をもぎとる人間が二人、後ろ姿で描かれている。顔は見えない。ただ無骨な手元が、黙々と作業する農家の夫婦の息づかいを感じさせる。

言葉がすぐには出てこないのだろう。ケンは、まだあるよと言いたげに、次の一枚を引きずり出そうとする。香魚子はそれを、近づいて

の言葉の無機質さのせいでは決してない。やがてぱりぱりと頭をかきながら、ケンはのどかな津軽弁で言った。

「他に置くどこねべ」

尖りかけた空気がふわりと溶けて漂う。まるで、叱られた子供みたいに、ケンが後ろで小さくなっていた。

半ば笑いながら、香魚子はつとめてやさしい声で訊いた。

「あのですね。——誰にも見せるつもりがないなら、百五十枚ものこの作品、いったいどういうつもりで描きためたのですか？」

眼鏡の下で、困ったような目がさまよう。香魚子は重ねて聞いた。

「こんなところに押し込むしか、ない絵を、どうして一生懸命、描いてるんですか？」

何が訊きたいか、今度はわかってくれたか、という目でケンをにらむ。だが、ケンの答えは香魚子の予想を超えていた。

「そりゃあ絵描きは絵を描くだろ。船頭が船をこぐようなもんだ」

争うつもりなどまるでない、だが決して曲げる気のない、カクたる主張。フクは後ろに下がり、電灯が作る光の輪からはずれて二人の会話を見守った。

おれはただ、絵を描けば、それでよい——。詩を書く男でもあるケンの、若き日の、決意のような言い訳のような、詩の第一連がよみがえってフクを揺すぶる。それは遠い日、東京で一人で暮らしていた自分にくれた手紙の中にあつた詩だ。

「でも、——でも、絵は誰かに見せなければ売れないし——第一、失礼ですが、絵を生活の糧にされてないなら、いったいどうやって生活なさ

つてゐるんですか？」

それは相当に失礼な問いだった。相手が香魚子でなかったら、フクもそんなこと人の勝手でしょう、と口をはさんだかもしれない。だが自分が入るべきでなかった。これは、外から来た訪問者が運ぶ空気と、この地に滞るケンの温度が、ぶつかり、攪拌されるか、あるいはそれぞれをタモって独立しているか、その対決なのだ。それに、フクはすでに答えを知っている。

「生活ってが？ 食ってぐぐらい、なんどしてもできるべ」

ケンの答えはまたしてもゆつたりとした笑いだった。空気が、ふわっと舞い上がる。あつけにとられ、香魚子はただ意味もなくケンを見上げた。

(玉岡かおる「ひこばえに咲く」による。)

(注) キャンバス || 油絵を描くのに用いる画布。

テラコッタ || 粘土で造形した素焼きの器物。

穀雨 || 太陽暦の四月二十日頃。

攪拌 || かきまわすこと。

ひこばえ || 切り株から出た芽。

1 ①④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。

2 [] にあてはまる最も適切な語句を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 突つ伏している
- イ そぞろ歩いている
- ウ 座り込んでいる
- エ 立ち尽くしている

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

幼¹時 不 勤 学 老 後 雖² 恨 悔³

(老いて後に恨み悔ゆと雖も)

尚⁴ 無⁵ 有⁶ 所⁷ 益⁸

(尚所益有ること無し)

幼時とは、人むまれて十歳になるときを幼といふなり。礼記の曲

礼にみえたり。およそ人は十歳の前後がくもんをつとむべきざか

りなり。大学の序に「かけることく、人むまれて八歳になれば、まつ

礼儀の作法、音楽の道、ゆみいること、むまなどにのる道、ものをかく

こと、さんようの法をよくよくならはしむるなり。これを「小学」に

るといふなり。さて十五歳にもなれば、家を「とこの」国をおさめ、

天下をたいらかにする道をおしふるなり。

(「実語教諺解」による。)

3 香魚子の目が大きく見開かれるとあるが、それはなぜですか。文章中の語句を用いて、五十字以内で書きなさい。

4 どうしてこんなことしてるんです に込められた香魚子の気持ちを五十五字以内で書きなさい。

5 「ない」と意味・用法が同じものを、文章中の傍線部 a～d の中から一つ選び、その記号と品詞名を書きなさい。

6 外から来た訪問者が運ぶ空気と、この地に滞るケンの温度とあるが、これはどういうことですか。八十字以内で書きなさい。

7 この文章の表現の特徴として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 短い文章の積み重ねによって表現される会話が、ケンとフク、香魚子の緊迫した対決場面をより強調している。

イ 津軽弁が、場面の緊張感を和らげる効果をもつと同時に、ケンの素朴な人柄を感じさせるように用いられている。

ウ 光がさす場面を多く描くことで、ケンの絵の真価を認めたフクの鑑識眼の鋭さを読者に強く実感させている。

エ 絵の描写場面において色彩の表現を多く使うことによって、香魚子の感受性の豊かさが伝わりやすくなっている。

(注) 礼記の曲礼 || 礼記は中国の書物。曲礼は礼記の中の一編。大学 || 礼記の中の一編。

1 幼時 不 勤 学 とあるが、この漢文が次の書き下し文となるように、返り点を付けなさい。

書き下し文

(幼けなき時勤め学ばざれば)

2 およそとはどういう意味ですか。最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア そもそも

イ あるいは

ウ そのうえ

エ ところが

3 かけるを、文章中の意味に合うように、漢字とひらがなを用いて書きなさい。

4 「小学」とはどういうことですか。文章中から適切な部分を抜き出し、はじめの三字と終わりの三字を書きなさい。

5 「とこの」を、現代かなづかいで書きなさい。

6 この文章を通して、筆者はどのような教訓を述べようとしているのですか。現代の言葉で、四十字以内で書きなさい。